

滋賀県守山市長  
宮本 和宏



日本貨物鉄道株式会社  
代表取締役会長兼会長執行役員  
真貝 康一

## 手を取りあえば、まだまだサスティナブルは広がる。

実証実験を終え、課題や今後の展望について日本貨物鉄道(株)真貝会長と、守山市宮本市長による意見交換が行われました。

実証実験の課題や可能性について  
お聞かせください。

**真貝会長** カーボンニュートラルの実現に向け、企業と個人の取り組みを同じ歩調で進めなくてはならない時代。その中で今回のような、環境にやさしい鉄道で自転車を運ぶという選択は、一人ひとりの環境に対する意識づけにも役に立つことと思います。また実験結果から、まとまったロットでの利用や、準備期間の設定などの課題がクリアになれば常時のサービスとして商品化できると評価しています。

**宮本市長** 琵琶湖に面する守山市は、ピッチを推進しております。インバウンド復活後、いかに国内外の方々を受け入れて



いくか。CO<sub>2</sub>を排出する自家用車での輸送、国外の方の空港から現地までの輸送方法、これらは大きな課題です。そんな中、今回のコンテナ輸送実験の成功は、自転車を軸とした地方創生の観光振興に大きくつながる取り組みになるのではないかと思います。

サスティナブルな社会の実現に向け、  
今後どのような連携をお考えですか？

**真貝会長** 日本に鉄道が開業して今年で150周年。人々の生活や経済の発展を支えてきました。150周年はサスティナブルでありましたし、これからもサスティナブルでなければなりません。JR貨物グループは長期ビジョン2030で社会に提供する4つの価値を掲げていますが、その中の「グリーン社会の実現」「地域の活性化」、この2つを地域と密着し、コミュニケーションを取りながら、社会がより豊かになるように尽くしていきたいと思っています。

**宮本市長** 今年度から見直している環境基本計画で、カーボンニュートラルに向け

たプロジェクトを位置づけ、市内市外の様々な企業と連携しながら進めていきます。イベント実施の際はカーボンニュートラルな輸送手段、これが当たり前の時代がくると嬉しいですね。守山市はもちろん、今回の取り組みを全国の自治体に紹介することでJR貨物様と強い連携を作っていたらと思います。

詳しい対談内容は動画で公開

前編

後編



今回の実証実験では、自立した事業展開に向けた輸送の日数・コスト、対象物の安心安全な輸送に向けた課題、将来的な自転車以外の輸送の可能性について整理しました。実証実験で得た課題を解決しながら、引き続き実用化に向け取り組み、この輸送モデルが、サスティナブルツーリズムの新常識として発展する未来創りを目指します。

本事業に関するお問い合わせはこちらまで



守山市  
MORIYAMA CITY

滋賀県守山市役所 都市経済部地域振興課  
住所: 守山市吉身二丁目5番22号  
電話: 077-582-1165  
メール: chiikishinko@city.moriyama.lg.jp



株式会社平和堂は本取組に賛同し、  
貨物コンテナを活用した自転車輸送  
実証実験業務を受託運営しました。



# 自転車を「貨物」で運ぶという選択を。 貨物コンテナを活用した 自転車輸送 実証実験事業 報告

サスティナブルツーリズムの観点から、  
観光客の大型荷物に注目し、  
新たな輸送方法の確立と発展を目指します

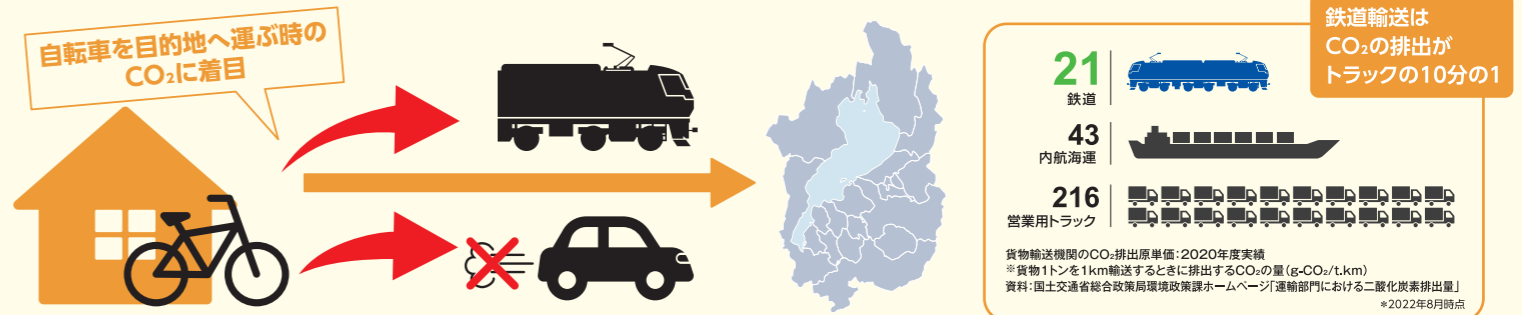


守山市  
MORIYAMA CITY

# サイクルツーリズムは、CO<sub>2</sub>を排出しないアクティビティ。 だからこそ、私たちは、 目的地までのCO<sub>2</sub>を考えます。

守山市は、地方創生の柱に「自転車を軸とした観光振興」を掲げ、さまざまな取組を行ってきました。近年はピワイチの認知度も上がり、全国から訪れるサイクリストも増加傾向にあります。アフターコロナを見据える今、国内外から宿泊を伴うサイクリストの集客を活性化させるにあたり、課題となるのは大型荷物「自転車」

の輸送方法の確立。現状では、観光客が自家用車で目的地まで運ぶケースがほとんどです。自転車アクティビティはCO<sub>2</sub>を排出しませんが、たくさんの人に訪れてもらえばもらうほど、目的地までのCO<sub>2</sub>が増えてしまっている状況を、サステナブルツーリズムの観点からも打開すべきと考えます。



そこで着目したのが「貨物鉄道コンテナ」。



目的地までの移動や輸送にもCO<sub>2</sub>排出を抑えた新しい方法として「貨物鉄道コンテナ」の活用を検討。この輸送モデルが実用化できるようになれば、環境配慮はもちろん、身軽になった観光客の観光意欲を刺激し、地域の観光振興、経済発展にも良い影響を及ぼすことが期待できます。今回は、滋賀県守山市で開催されたトライアスロン大会をモニター事業として、出場選手の自転車を貨物鉄道コンテナで輸送する実証実験を、下記のとおり実施しました。

## 守山市で開催されたトライアスロン大会に出場する、選手6名の自転車等の手荷物を貨物鉄道コンテナで輸送。

### LAKE BIWA TRIATHLON IN MORIYAMA THE 2nd ANNUAL



令和4年7月2日(土)開催  
「平和とサステナブル」をコンセプトに掲げる、琵琶湖を舞台としたトライアスロン大会の第2回大会。参加者約550名。エントリー開始後わずか2日間で定員に達した注目大会。

動画も公開中

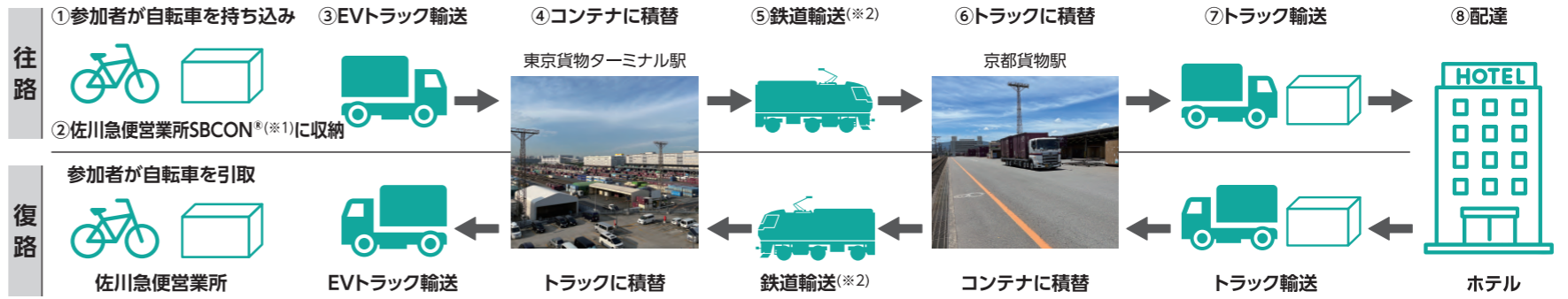


### 実験結果

- 1 輸送中のCO<sub>2</sub>排出量**  
トラック輸送と比べて約91.4%削減!※約45.04kg-CO<sub>2</sub>  
※算出根拠  
3tトラック(一般的な配送車)で輸送した場合の想定CO<sub>2</sub>排出量→約523.77kg-CO<sub>2</sub>(燃費法で算出)  
本トライアル輸送での想定CO<sub>2</sub>排出量→約45.04kg-CO<sub>2</sub>(燃費法で算出)
- 2 ①梱包資材の削減量**  
約23~28㎡(畳約15畳分)繰り返し利用できる梱包資材SBCON®を5台活用  
②梱包なし輸送の実現  
大型の輸送箱は分解工程が少なく初心者でも利用しやすい反面、「箱自体」が旅先や自宅で荷物になるというデメリットがあります。今回の実証実験では、梱包を一切行わない輸送を実施。モニター参加者は、まるで駐輪場に自転車をとめる感覚で、長距離自転車輸送を体験いただき、これに係る費用や課題を検証しました。

<販売価格の検証>  
本輸送については5台を約20万円にて輸送。1台あたりの輸送費用は4万円となりました。今回と同様の資機材を利用した場合のコンテナの最大積載量は12台と推定されるため、今後の課題としては、コンテナの最大積載量の自転車を輸送することで1台あたりの単価を下げるなど利用者の募集方法が課題であると考えます。

<課題>  
・今回の検証では、グループで同じ場所に集荷しました。今後、個人(自宅)までの集荷が理想。  
・ホテル受け入れ側として高額の荷物となるため、責任問題が大きな課題。  
自転車台数が増加すると、保管スペース(場所・料金等)の問題が発生します。



### 本実験における各事業者実施内容

 佐川急便株式会社 「EVトラック」での輸送 佐川急便営業所と東京貨物ターミナル駅間での輸送にEVトラックを使用。走行中のCO <sub>2</sub> 排出量は実質ゼロ。 *1 [SBCON®]は合同会社S-WORKSの登録商標です。 *2 鉄道輸送の利用運送事業者は日本フレートライナー株式会社です。	 日本航空株式会社 自転車輸送専用コンテナ「SBCON® (Smart Bicycle Container)」提供。 自転車の分解を最小限にとどめ、手軽かつ安全性の高い梱包が可能。繰り返し利用することができるため、梱包資材の廃棄物削減に貢献。 * [SBCON®]は合同会社S-WORKSの登録商標です。	 日本貨物鉄道株式会社 / JR貨物 「貨物鉄道コンテナ」での輸送 東京⇄京都間の長距離輸送に採用。さらに、この輸送で排出されるCO <sub>2</sub> については、Jクレジットにてオフセット。Jクレジットの活用はJR貨物で初めての試み。本トライアルでは滋賀県の森林由来のクレジットを利用。
---	--	---

### 実証実験参加者コメント — 「環境にいい選択が、自分にとっても嬉しい結果に」

身軽に行動できる、心身ともに大会に集中できる、地域を楽しむ余裕ができる。また参加したいと思ってもらえることで、観光振興の発展をも持続可能なものに。

国土交通省 自転車活用推進本部事務局 次長(道路局 参事官) 金籠 史彦 様  
自転車そのままの積載でもパツチリ固定されるので安心ですし、新幹線で身軽に現地入りできて体力的にも楽です。何より貨物ターミナル駅で鉄道コンテナに愛車を積載する瞬間のワクワク感は格別です。そして、究極の人力競技であるトライアスロン参加のためにCO<sub>2</sub>を極力排出しないという点が、SDGsに貢献しているという精神的充足感を与えてくれます。より多くの人々に知っていただき、快適でサステナブルなサービスとして実装化されることを強く期待します!

オン・ジャパン株式会社 鎌田 和明 様  
今回は選手として参加しましたが、前輪を外すだけで簡単に収納できるケースは非常に利便性が良かったです。当社は各地でイベントや大会を運営しており、会社としてもこのサービスを利用したいです。サステナブルをテーマに掲げている大会においてコンテナ輸送でCO<sub>2</sub>を削減するというアピールは会社のイメージアップにつながると感じます。

トライアスロン大会実行委員長 田中 信行 様  
世の中の全ての活動と行動において、そこに関わる一人ひとりの気付きが大きな効果となって現れると考え、サステナブルをトライアスロン大会のコンセプトに加えることになりました。賛同してご協力をいただいた企業の皆様の活動が大会を通じて多くの人に伝わり、大きな力となることを期待しています。